中部大学大学院　国際人間学研究科レポート

2015 Vol.7

GLOCAL

Forum

■国際経営の視点で見る中堅･中小企業のアジアビジネスにおける成功要素 ―― 舛山誠一

■20世紀初頭フランスにおけるフェミニストの課題
ラディカル派 M.ペルティエを中心に ―― 見崎恵子

Note

■「マクライシ」の機能とその変遷 ―― 橋本英征

■近世邦楽における 一節切(ひとよぎり)尺八の研究
―その奏法について― ―― 加藤いつみ

■古代エジプトにおける音楽
カイロノミー(指揮法)を中心に ―― 野中亜紀

News & Record

■2014年度 修士論文の提出と審査結果

■2015年(9月修了) 修士論文の提出と審査結果

■2014年度 国際人間学研究科博士前期課程学位授与式を開催

■2015年(9月修了) 国際人間学研究科博士前期課程学位授与式を開催

■国際人間学研究科教員による研究報告会を開催

■院生による研究報告会「院生の力」を開催

■「下街道―歴史を生かしたまちづくり―」のシンポジウムを開催

中部大学大学院国際人間学研究科
Chubu University Graduate School of Global Humanics

ごあいさつ

中部大学大学院、国際人間学研究科レポート　GLOCAL Vol.7 をお届け致します。

昨年、中部大学は開学50周年を迎えることができました。現在、本大学には６つの大学院研究科がありますが、そのうち国際人間学研究科は、中部大学国際関係学部を基礎に1991年に創設された国際関係学研究科国際関係学専攻をルーツとして発足しました。その後、人文学部（1998年設立）を基礎とする２専攻（言語文化専攻、心理学専攻）が2004年に合流して国際人間学研究科として組織・名称を改め、さらに2008年には歴史学・地理学専攻が加わって現在の４専攻体制が整いました。

小誌名の由来でもある GLOBAL と LOCAL の相互関係は、近年、ますます重要性を増しています。海外から日本へ訪れる観光客の増加に象徴されるように、日本や日本文化に対する国際的関心は高く、国際的な交流の機会は日常的レベルにまで広がってきました。こうした動きを真正面から受け止め、日本が誇るべき伝統的文化や技術を世界に紹介しつつ、さらにレベルの高いものへと発展させていく必要があると思います。LOCAL を極めることで GLOBAL 社会に貢献にする、そのような気持ちを持ち続けたいと思います。

小誌を通して、本研究科の日頃の活動の一端がご理解いただければ幸いに存じます。

2015年10月15日

林　　上（中部大学国際人間学研究科長）

GLOCAL

GLOCALは、GLOBALとLOCALを組み合わせた造語であり、地球規模でのグローバルと
身近なローカルを、ともに等しく重視する考え方を意味しています。

Profile
国際人間学研究科　国際関係学専攻　教授
舛 山 誠 一（MASUYAMA Seiichi）
カリフォルニア大学バークレー校　MBA。専門は国際経営学。日本企業の中国を中心としたアジア地域における経営に関心を持っている。

Forum

国際経営の視点で見る中堅・中小企業のアジアビジネスにおける成功要素

中堅・中小企業のアジアビジネスの分析の枠組み

我が国の中堅・中小企業が近年進出意欲をとみに強めているアジア地域での事業の成功要素を探すには、中堅・中小企業的な特殊性に重点を置くよりも、大企業・中小企業を問わない「国際経営」の視点に重点を置くべきだと考える。というのは、冨山が主張するように、グローバル化が進展すると、大企業・中小企業の違いよりも、製造業などグローバルな競争にさらされるグローバル企業と地域市場のサービス企業などローカル市場で寡占的に利幅は薄いが安定的な収益を挙げられるローカル企業との区別がより重要になると考えられるからである。海外進出する企業は概ねグローバル企業と見なされる。

とは言え、中堅・中小企業には大企業とは異なる強みと弱みがあり、この視点を加味する必要もある。中堅・中小企業の強みには、①迅速な意思決定、②経営の柔軟性、③小規模市場での存立可能性などが挙げられる。一方で弱みとしては、①経営資源の不足（人材、資本など）、②特に大企業への依存・従属的な企業におけるマーケティング能力の不足・自立性の不足、③国際経験の不足などが挙げられよう。

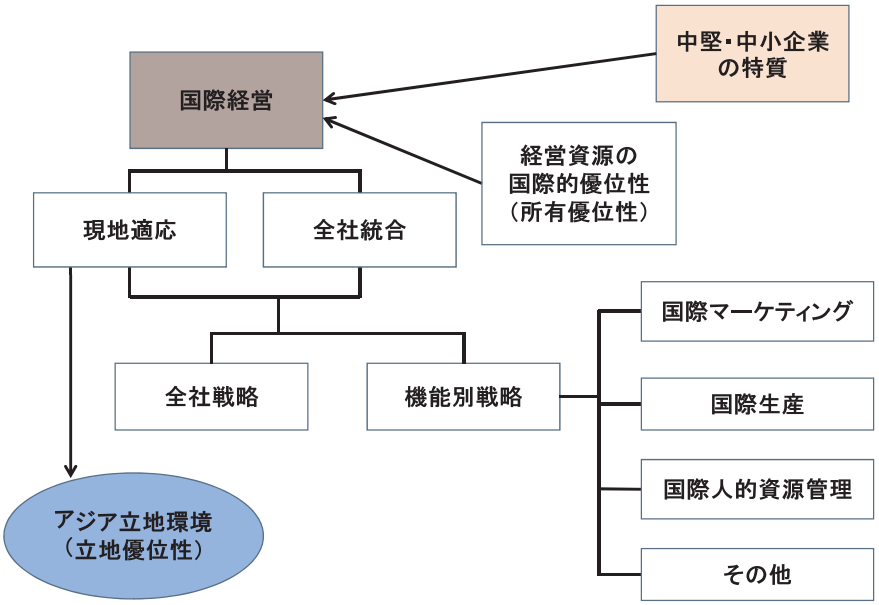
国際経営の枠組みとしては、①進出企業が技術などの経営資源の面で現地市場における優位性を持っていることと、②進出先の国・地域が市場としての魅力、生産コストなどの立地面で日本や競合国・地域に対して優位性を持っていることが必要だということがある。

また、国際経営において、③現地の環境に適応する必要があると同時に、③完全に現地化するのではなく、本社・拠点間の統合・標準化を行うことが必要である。適応すべき立地環境の主要な要素として、現地の政治、経済、文化に加えて、①との関連から、現地における企業間競争が重要である。④国際経営戦略は、全体的な戦略と、国際生産、国際マーケティング、国際研究開発、国際人的資源管理などの機能別戦略に分けられる。

アジアの立地環境

経済面に関しては以下のような点が挙げられる。①賃金の急速な上昇によって、全般的に生産拠点としての優位性の低下する一方で、所得の向上・中産階級の台頭によって、消費市場としての魅力が高まっている。②各国・地域の経済発展段階や人口動態が多様で継続的に変化しているから、それらの立地優位性は、各国・地域で異なり変化している。労働供給面の優位性や市場の成長性は、中国からASEAN、インドに、ASEANの中ではタイのような先発国からインドネシア、フィ

分析の枠組み



リピン、ベトナム、ミャンマーなどにシフトしている。一方で、④中国などにおいては、高学歴化や産業構造の高度化により、高度人材の供給やより複雑な製品の生産における優位性は高まっている。

政治は経済政策・外資政策・対日関係などへの影響を通じて、依然としてアジア諸国・地域の立地優位性を大きく左右しており、この状況の把握とそれへの対応が重要である。これに関連して、法治の弱さが、アジア諸国の投資環境の大きな欠点である。特に、儒教的な関係主義の伝統が強い一方で欧米の影響の少ない中国においては、取引の不確実性・模倣品の横行などの問題を生じ、これへの対応が大きな課題になっている。

グローバル化の進展により経済的な障壁が低下し、また、アジアにおける国際経営の重点が、生産目的から市場志向に変化する中で、文化が克服すべき障壁として重要性を増している。これまでも、中国における日本企業の人的資源管理・マーケティングなどの経営上の困難は、この問題の理解と対応が不足した面が大きかったと考えられる。

アジアにおける企業間競争に関しては、中国における企業間競争が最も激しく、インドがこれに次ぎ、ASEANにおける企業間競争は相対的に緩やかであると言えよう。一方では、全世界から企業が参入している中国市場においては、欧米企業との取引機会が生まれると言う利点もある。

アジア進出中堅・中小企業の SWOT 分析

S（強み）	W（弱み）
個別企業の経営資源の優位性 中堅・中小企業の一般的な強み 　迅速な意思決定 　経営の柔軟性	個別企業の経営資源の制約 中堅・中小企業の一般的な弱み 　経営資源（特にマーケティング）の制約 　自立性の不足
O（機会）	T（脅威）
個別産業・企業にとっての機会 低コスト生産環境 知識人材の豊富さ 成長市場 市場統合の進展 経営活動の自由度の拡大	個別産業・企業にとっての脅威 賃金などのコスト上昇 物理的社会的インフラの不備 現地環境の多様性と急速な変化 大企業との継続的取引関係の縮小

（出所）筆者作成。

中堅・中小企業アジア進出の成功要素

主に中国の上海に進出している中部圏中堅・中小企業の事例研究から、アジア市場の状況を勘案して演繹的考察することにより、アジア市場における中堅・中小企業の成功要素には以下のようなものがあると考える。この考察に当たっては、中国で最も成功した日本企業の一つだと言われる岐阜県本巣市のステンレス製タンクメーカーである森松工業（株）の事例を参考にした。

① 適切な進出先と進出時期の選別

上記のように、アジアは多様な発展段階の国から構成されているので、自社の商品の性質、能力などからどの市場にどの段階でどのような形態で進出するかを選択する必要がある。このためには、進出以前に十分な市場調査を行うことによって市場の複雑性と変化に対応する必要がある。

森松工業の場合、進出前に社長自らが何年にもわたって定期的に中国を訪れて市場リサーチを行い、世界の多くの投資候補地域と比較検討を行った結果、中国が一番だとの確信を持って進出した。進出時期も、1989年の天安門事件から日が浅く競合相手もほとんどいなかったことから、欧米日優良企業顧客の獲得することができ、先行者利益を享受した。

② 製品・サービスの差別化と現地市場への適応

差別化できる優位性を持った強力な製品を持つことにより、新興国で課題となる売上債権の回収、流通網構築、政府との関係などが容易になる。多くの場合、進出前にこのような優位性を本国市場で確立している必要がある。このような基盤を本国で確立していないのに、日本市場で窮地に陥ったからアジアに進出した場合、ほとんどの場合討ち死にすることになる。

アジア市場において日本企業が優位性を持つのは、多くの場合、高機能・高品質の高級製品であるが、アジア市場においてはこれらの製品の市場規模は相対的に小さく、市場規模が大きくて成長性の高い「ボリュームゾーン」を逃すことになる。ただ、コスト面で現地企業と正面から競争することは困難である。品質・機能の優位性を保ちながら、コストダウンを進めて、やや割高な価格に見合う顧客にとっての「価値」を提供する必要がある。文化面などを含めて、製品・サービスの現地への適応が必要である。コストダウン、現地適応のためには、生産・研究開発面での現地化を進めていく必要がある。

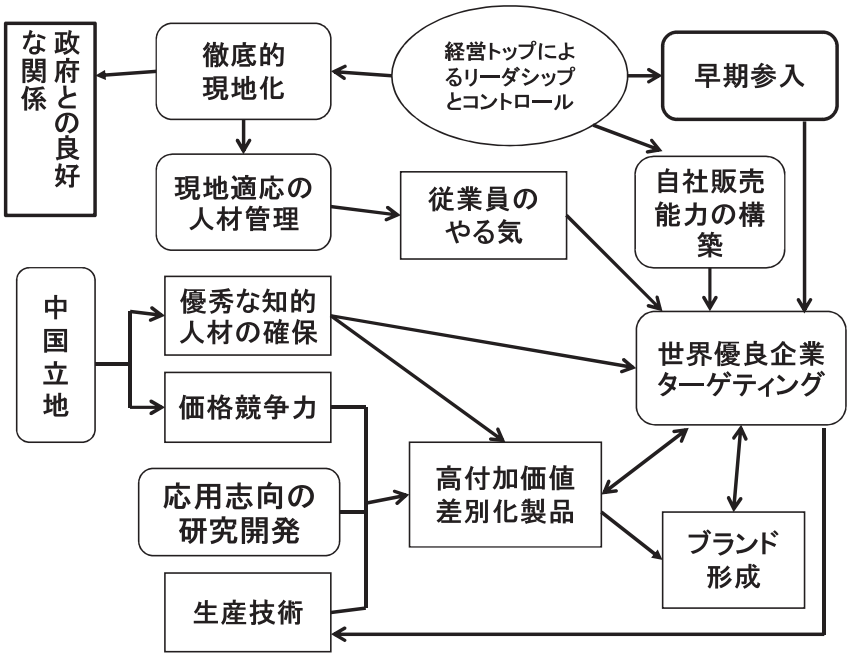
同時に、所得格差の大きなアジアにおいては、高価格帯市場も大きく成長性も高い。また、アジアの発展によって、市場の高級化も急速に進展しており、これへの対応と、高価格帯市場における競争力の強化の必要性も高い。

森松工業の場合、進出後すぐに現地企業に製品を模倣されて差別化製品を失い、苦境に陥った。この時、優秀な現地人従業員主導で別業種向けの高付加化価値製品を開発して、差別化に再び成功した。また、現地調達・生産、大規模投資による低コスト生産・短納期化も実現して、価格面・納期面での競争力を確立した。

③ マーケティング機能の強化

上記の様に、中国を筆頭にアジアにおける消費市場として重要性が増しており、また、中堅・中小企業は、系列企業から日系の非系列、日系企業から欧米企業、さらには現地企業へと顧客の多角化を進めていく必要があるので、国際マーケティングの重要性が高まっている。しかし、モノづくり志向の強い日本

森松工業の中国ビジネスの主な成功要素



企業にとって、生産管理は比較的得意分野であるのに対して、マーケティングは大きな弱点であり、大企業依存の強い中堅・中小企業にとっては、とりわけそうである。この克服が必要である。

森松工業の場合、1990年中国進出前の1987年に商社部門を設立し、海外営業機能を創造した。上記の様に開発した高付加価値製品を欧米企業に販売することによって売り上げを増大させた。さらに、中国で優秀な人材を採用して国際マーケティング機能を強化することによって、中国のみならず全世界へのマーケティング活動を行っている。

④　経営の自立化

上記のようなマーケティング機能の強化による顧客の多様化を行うためには、系列・大企業依存を脱却した経営の自立化が必要である。グローバル化によりタテの企業間の関係よりヨコのネットワークが重要になり、これに対応する自立的経営が必要である。

⑤　リスクコントロール

財務基盤が弱く、また企業規模が小さくて複数市場への分散が困難な中堅・中小企業にとって、アウェイの外国市場において生存していくためには、リスクコントロールが重要である。代金回収の確保に加えて、先にあげたようなマーケティング機能の強化などによる現地に進出している欧米企業などへの顧客の分散などもリスクの低下につながる。

森松工業の場合、前述のような顧客業種の多角化・世界市場への多角化を徹底して、全世界・全業種顧客への販売を行っている。また、顧客を選別し、代金回収策を強化することによって、中国の現地企業への販売も拡大している。

⑥　人的資源管理の革新

長期雇用・年功序列的な日本的人的資源管理は、良いところもあるが、世界的には特異であり、雇用の流動性が高く、慣行も異なる外国ではなかなか通用しない。また、市場獲得へと進出の目的が変化し、マーケティング、研究開発などにより多くの知識人材を雇用することになり、これら人材のパフォーマンスを上げるために、現地化に加えて、世界のベストプラクティスを取り入れた人的資源管理の革新が必要となる。

森松工業の場合、経営陣の徹底的な現地化、人的資源管理システムの現地化と世界のベストプラクティスを取り入れることによる透明性・公平性の徹底を行い、現地従業員の「やる気」を引き出すことに成功している。

⑦　グローバルな経営基準の設定

関係主義的な要素が強く、法治の度合いも弱いアジアにおいて、現地適応を行うことは、アジア的企業倫理・行動基準につかって企業倫理や企業パフォーマンスを低下させるリスクも存在する。同時に、日本的なタテ社会的企業倫理・行動基準はヨコ社会的なグローバル環境に適応しないという問題もある。この面で、アジア事業においても、世界のベストプラクティスの学習による経営革新が必要である。

森松工業の場合、前述のように中国拠点を通じて欧米日の有力企業を顧客にすることによって、日本的な常識から見ての「驚き」を伴いながら、世界の企業倫理・行動基準を学習・実践してきた。

⑧　トップの決断力と現地経営へのコミットメント

アジア市場のタフで複雑で変化の激しい環境に適応して成功していくには、迅速で継続的な意思決定を行って行く必要がある。この面で、トップダウン的な中堅・中小企業はサラリーマン的な日本の大企業に対して強い優位性を持っている。経営者の資質によるところが多いが、この優位性を最大限に活用していくべきである。

森松工業の場合、前述のように現地人トップに徹底的な権限移譲を行う一方で、本社トップが月の半分を現地に滞在して、現地の状況を密接に把握している。また、現地工場に多数のウェブカメラを設置して、圧倒的な技術知識を持つ経営トップが日本で常時ウォッチして、アドバイスを行っている。

このような成功要素は、個別に重要であるだけでなく、相互に関連している。これらを連動させることによって好循環を生み出すことが重要である。

参考文献

冨山和彦（2014）『なぜローカル経済から日本は甦るのか』PHP新書
舛山誠一（2015）『森松工業の中国ビジネスの成功要因』貿易風　Vol.10

Profile

国際人間学研究科　歴史学・地理学専攻　特任教授

見 崎 恵 子 (MISAKI Keiko)

神戸大学大学院経済学研究科博士課程後期課程退学。修士（経済学）。専門は西洋社会経済史、女性・フェミニズム史。西欧の食生活史や家族史から主要研究テーマをフランス近代における女性運動へと移し、現在は第三共和政下のラディカル派フェミニズムの主張に強い関心がある。フェミニズムと社会主義・アナキズム、労働運動、平和運動などとの関係を、現代的課題を視野に入れて検討している。

Forum

20世紀初頭フランスにおけるフェミニストの課題

ラディカル派 M. ペルティエを中心に

第一波フェミニズムの時代にあって

20世紀初頭はフェミニズムの歴史において「第一波フェミニズム」と言われる女性運動が高揚した時期である。その中心は女性参政権運動であり、とくに英米での盛り上がりが注目されてきた。しかし、フェミニストの要求は参政権実現に留まらなかった。「人権宣言」の国フランスでは、性に関わらない個人としての自由・平等を求めて、性の本質論を退け、あらゆる面での差別や抑圧を告発し、様々な社会運動・社会変革の闘いに参画したフェミニストたちがいた。「差異の中で穏健に」女性の「女らしい」政治参加と社会貢献を主張する主流派フェミニストから、大いに嫌われたラディカル派フェミニストとして、ここではマドレーヌ・ペルティエ(Madeleine Pelletier 1874～1939) を取り上げよう。

人は女に生まれない、女になるのだ

『第二の性』を著したシモーヌ・ド・ボーヴォワールは、「女」が社会的構築物であることを論証して、1960年代末にはじまる「第二波フェミニズム」、ウーマンリブの運動に大きな刺激を与え、「ジェンダー」概念の形成に貢献したが、すでに20世紀初頭においてペルティエは、「女はつくられる」ことを心理学や女子教育などの観点から主張していた。

パリ2区の労働者街の極貧家庭に生まれ、初等教育を終えただけのペルティエは、独学でバカロレアに挑戦し、パリ大学で医学を学び、フランス初の公立精神科病院女性インターンとなった。「女性のいわゆる心理学的生理学的劣等性について」や『娘に対するフェミニスト教育』等の論文・著作において、ペルティエは幼少期からいかに「女性性」がつくられていくかを論じ、社会的差別・抑圧の根拠とされる性の本質論を否定した。

私の服は「自由・平等」を告げる

ペルティエは、社会が強要する「女らしさ」を断固拒絶した。それを常に表明する手段が「男装」であった。革命家と呼ばれる女性たちもが裾を引きずるドレスをまとい、花飾りのついた大きな帽子を揺らして演説する時代にあって、ペルティエは髪を短く刈り上げ、糊のきいたカラーにネクタイを巻き、男物スーツを着込んだ。背が低く太っている自分には似合わないと嘆きつつも、ペルティエは「男装」をあえて選んだ。

「修道女がキリスト像を身につけ、革命家が深紅の野バラを飾るように、私は自分の思想を外に表したい。…料理エプロンを着けた奴隷女と違って、髪を短くして襟カラーを付けよう。私が自由を欲することを表明し宣言するために…。」

現代なら「男装」を自由や平等と直結させることなどありえないが、ペルティエの時代には「それは自然に反することで、フェミニズムに害を与える」とフェミニスト仲間すら激しく非難する反社会的行動であった。

ちなみに、フランスでは1800年11月のパリ警察令「異性装に関する勅令」によって、健康上の理由で許可された場合を除いて、女性が男性の服装をすることは禁じられていた。20世紀に入る頃にはこの警察令は事実上無効となっていたが、服装といった日常的ふるまいのコードが「男／女」の構築に大きな役割を果たしていることを、ペルティエは決して看過しなかったのである。

普遍主義の立場に徹する

「女性性」を前提とするフェミニストたちの権利要求に対して、ペルティエはすべての人間の同等の権利を求めた。この点でペルティエは、フランス革命の原理を継承し、その徹底を求める19世紀フランスの諸革命思想・運動の流れの中にある。「女性の権利要求を…社会的有用性に根拠をおいて行うべきではない。その正当化の根拠をどこか別の処に求めることなど必要ではないのだ。その要求はそれ自身で正当化されうるものである。」とペルティエは書いている。

しかし、「人権宣言」の「人」が白人・男性・

有産階級を前提にしながら「抽象的個人」として打ち立てられたものである限り、「差異」は排除・無視される。近年ではこの「普遍主義」への批判が高まり、女性の現実とアイデンティティを軸にした運動・理論が重視されるようになった。ペルティエは「近代化」論に囚われた「過去のフェミニスト」にすぎないと言われそうだが、果たしてそうだろうか。

フェミニズムだけで社会は変革できない

現代から見てペルティエが「過去」になるもう一つの側面が、フェミニズムと社会主義諸潮流との関係である。ペルティエは、社会主義諸派が統一して1905年に成立した「フランス社会党」（正式名称「労働者インターナショナルフランス支部、SFIO」）に1906年初頭に入党し、極左のエルヴェ派を代表して党常任運営委員会にも参加している。さらに、ロシア革命後、社会党の分裂によって結成されたフランス共産党にも加わった。社会党大会では女性参政権の動議を可決させ、選挙では社会党から非合法の立候補を行った。1922年には『共産主義ロシアへの危険な旅』を著して、社会革命がもたらす女性解放の側面を評価している。

しかし、後に「マルクス主義とフェミニズムの不幸な結婚」と言われるように、社会主義者の中にはプルードン流の「女嫌い」や、フェミニズムをブルジョワ女性の「性戦争」だと批判し、女性解放の課題を遠い未来へと先送りする考え方が広がっていた。実際　ペルティエのフェミニズムは社会党でも共産党でも受け入れられなかった。それでもペルティエは社会主義･革命的諸派の側に留まり、最後までロシア革命擁護の演壇に立った。

「私は社会主義者か？　このことをいまだ真剣に考えたことはない。…私がわかっているのは、私が社会正義を愛していること、…相続の廃止、あらゆるレベルの教育の無償化、子ども、高齢者、病人にたいする十分な国家的保障、階級の区別も金銭崇拝もなくなることである。…私はこの正義の問題として、平等な待遇を受ける女性の権利の問題として、フェミニズムを闘ってきた。」

ペルティエは社会主義のあれこれの教義に拘ったわけではない。個人個人が社会の中で平等に生きる権利を獲得すること、この社会正義の実現のために全方位で闘いに参加することが重要だと考えたのである。教権主義と闘い、自由な思考を発展させるためにフリーメイソンに加わり、結婚や家族制度の抑圧を告発し、個人の自由な生き方や感性を発展させることをうたうアナキストたちと連携したのもそのためであった。

「産む産まないは私が決める」

第二波フェミニズムの重要な課題の一つ「避妊・中絶」問題に、20世紀初頭において命がけで取り組んだのもペルティエらラディカル派フェミニストであった。「個人は、自らの望むように生き、子を産み、あるいは産まない絶対的権利をもつ。国家の利害で諸個人の自由を制限するなら、もたらされるのは常に幸福ではなく不幸である。」とペルティエは言う。『中絶の権利』を出版し、自ら開業医として女性の出産や治療に携わったペルティエは堕胎罪の嫌疑をかけられ、ついに1939年逮捕される。裁判沙汰を避けるため「責任能力なし」として精神科病院送りとなったペルティエは、その年12月、看取る家族も友人もいないこの収容施設で死去した。

女性を「産む機械」に喩え、「わがままな女性」を鋳直すべく、子宮頸がん予防ワクチン接種とセットで「女性手帳」を配付し、母性の社会的責務を自覚させようとする国家政策が進む現在、ペルティエらが百年以上前に開始した闘いは、いまだ終わっていない。

嫌われるフェミニスト

科学や医学界、及び政治の世界という「男の世界」にふてぶてしく割り込んだフェミニストは、おそらくペルティエでなくとも嫌われたであろう。それが「女らしい」服装も行動も拒否し、結婚・家族制度を否定し、出産奨励策を批判し、反軍隊・反愛国主義を掲げて平和運動に参加するような女となれば、なおさらのことである。

とはいえ、ペルティエの最大の「瑕疵」はその二重の「裏切り」にあったように思われる。貧しく搾取される労働者階級及び抑圧・差別される「女性階級」から、ペルティエは「脱出」しようとし、実際ある部分それに成功した。そして次のように公言する。「私はずっと変わらずフェミニストだった。死ぬまでフェミニストだろう。だが私は今あるがままの民衆も女性も嫌いである。彼らの奴隷根性が私を憤慨させる」と。

労働大衆を疎み、女性たちを嫌いだと言い放つ「社会主義フェミニスト」など、あってはならない存在だろう。現代ならば、強者の論理に取り込まれ、女性の「男性化」をめざす近代主義の、「植民地宗主国」フェミニストとの批判も聞かれそうだ。だが、すべての諸個人の自由と平等というペルティエの徹底した個人主義と普遍主義は、もはや不要なのか。私はそうは思わない。

弱者を助けるためにではなく、また属する集団・共同体の大義のためにでもなく、個々人が自分を苦しめる搾取・差別・排除を見据え、それに対して立ち上がり闘い続けることの重要性を、ペルティエは訴え、実践した。だが、そうした諸個人の「共闘」の手前で挫折してしまった。そこにペルティエの不幸があったと言わなければならない。

主要参考文献

Bard, Ch., *Les filles de Marianne. Histoire des féminismes 1914-1940*, Fayard, 1995.

Bard, Ch. (dir.), *Madeleine Pelletier (1874-1939): Logique et infortunes d'un combat pour l'égalité*, Côté-femmes éditions, 1992.

Gordon, F., *The Integral Feminist: Madeleine Pelletier, 1874-1939, Feminism, Socialism and Medicine*, University of Minnesota Press, 1990.

Maignien, C., *Madeleine Pelletier: L'éducation féministe des filles*, Syros, 1978

Sowerwine, Ch., *Les femmes et le socialisme. Un siècle d'Hisoire*, Presses de la Fondation Nationale des Sciences Politiques, 1978.

Sowerwine, Ch. & Maignien, C., *Une Féministe dans l'arène politique*, Editions ouvrières, 1992.

Profile
国際人間学研究科　言語文化専攻　博士前期課程
橋 本 英 征 (HASHIMOTO Hideyuki)

1989年愛知県生まれ。中部大学大学院国際人間学研究科（言語文化専攻）博士前期課程在学中。専門は日本民俗学。主な研究領域は、葬送儀礼（葬式）・墓（土葬墓・両墓制）などにおける遺体の扱い、祖先祭祀（盆行事）による生者と死者の関係性について。「死」の儀礼や行事を通じて、日本では「死」がどのように受容されてきたか。また、日本人は死者に対してどのような観念を抱いてきたかを検討する。

Note

「マクライシ」の機能とその変遷

マクライシの概要―問題の所在―

「マクライシ」（枕石）とは、遺体を埋葬した墓（土葬墓）の上に設置する自然石の俗称（民俗語彙）である。その名称は地域によって異なり、他にも「ホトケイシ」・「オガミイシ」・「アタマイシ」などの名称が用いられている。

伝承者（地域住民）にこのマクライシの用途を尋ねると、ここが埋葬箇所であることを第三者に示す「目印」のために設置するのだと説明される。また、『日本民俗大辞典』にも、これと同様の記述がなされている（福田アジオほか（編）、吉川弘文館、2000年）。

しかし、全国各地におけるマクライシの用途を収集すると、「目印」以外の目的でそれを設置している地域が散見される。そのため、次のようなことが考えられる。現代におけるマクライシの用途は「目印」であるが、過去には別の機能が期待されていたのではなかろうか。すなわち、時代や社会の変化に連れて、元来の機能が忘却された。そして、新たに付加された機能が、「目印」なのではなかろうか。

こうした観点から、マクライシの機能における歴史的変遷過程を「実験」によって明らかにすることが、本研究の課題である。

研究方法
―「実験の史学」としての試み―

「実験」とは、日本民俗学の創始者である柳田国男が1935年に提唱した、歴史学の新たな手法である。柳田は「実験の史学」にて、これを次のように説明している。①民俗（文化）は常に変化する。②しかし、全国各地の民俗が一斉に変化するわけではない。③また、変遷の過程には遅速がある（都市は速く、農村・離島は遅い）。④そのため、全国各地の事例を収集・比較することにより、変遷過程を明らかにすることが出来る（『柳田国男全集』27巻、筑摩書房、1990年）。

この手法を本研究で使用するためには、当然ながら、全国各地のマクライシの事例が必要不可欠となる。しかし、現代日本では99.9%の自治体が火葬を採用している。また、それに伴い土葬墓が減少し、現存しているものはあまりにも少ない。そのため本研究では、文献資料による事例収集を行った。ここでいう「文献資料」とは、全国各地の民俗調査報告書や民俗誌、自治体史などを指す。また、愛知県尾張東部や、三重県・香川県の離島など、限られた範囲ではあるが、筆者自身による現地調査も行った。そうして収集した資料、全209事例（マクライシの事例のみ）を比較・考察したところ、以下のような結論が得られた。

マクライシの機能とその変遷
―目印から火車除けへ―

マクライシは、喪主や穴掘り役の人が、海や川などで入手する。その際、「一度触れたら他の石に代えてはならない」などの禁忌（タブー）があることが注目される。そうして入手した石の主な用途は、やはり「目印」であり、次いで「膳置き」や「石塔の土台」などの実用性が挙げられる。しかし、「マクライシ」という名称や、入手時の禁忌などから、それには宗教的要素が内在していることがわかる。これに関連して、マクライシには「動物除け」だとする地域が存在していることが注目される。（土葬）墓の上に石を置くことで、「山犬や狼に掘り起こされない」というものである。こうした事例から、マクライシには、遺体に危害を加える狼のような存在から、遺体を保護する機能があることが明らかとなる。ところで、こうした肉食動物には、（土葬）墓を掘り起こしてまで人肉を求める習性があるとは思えない。従って、元来は他の何者かであったのが、時代が下るに連れて山犬や狼などへと変化した結果であろう。では、こうした「遺体に危害を加える存在」の原型となるものは何か。それは、「火車」（カシャ）である可能性が高い。火車とは、地獄から去来し、遺体を奪うと考えられた妖怪である。近世以前には、こうした存在が伝承されていたが、近現代以降それは狼などの肉食動物へと転化したと思われる。

以上のことから、マクライシの本来の機能は、火車による「遺体の奪取」からの「遺体保護」であった。しかし、火車の伝承の希薄化により、狼などの動物が「遺体を奪取する存在」の担い手となった。これに連動し、マクライシの機能も「火車除け」→「動物除け」→「目印」（など）へと変化したと考えられる。

Profile

国際人間学研究科　言語文化専攻　M1

加 藤 い つ み (KATO Itsumi)

1942年岐阜県生まれ。1965年国立音楽大学音楽教育学科卒。2005年名古屋大学大学院にて修士（教育）の学位修得。2015年中部大学大学院国際人間学研究科博士前期課程在学中。16･17世紀に盛んに吹かれた一節切尺八に関心を持ち、江戸期に成立した一節切の譜書の翻刻を通して、その楽器の奏法と江戸期の音楽理論の研究を目指している。職歴：名古屋市立大学、名古屋経営短期大学、中部大学教授

Note

近世邦楽における 一節切（ひとよぎり）尺八の研究
―その奏法について―

はじめに

本研究は、17世紀後半に成立した一節切尺八（以下一節切と略記）の譜書『宗左流尺八手数並唱歌私之目録』（以下『宗左流』と略記）を通して当時吹かれた手（一節切は曲の事を手と呼んでいる）、その奏法、音楽理論そして解説から当時の音楽を復元しようとするものである。200年近く忘れられていたこの笛に、今世紀初頭になって復活の兆しが見えてきた。東京・名古屋・大阪・京都・大分、長崎等に愛好者がグループを作って活動していることがつい最近わかった。

今回は、①一節切尺八とは、 ②17世紀に吹かれた手とはやり唄、③今後の研究　の三点について報告する。

①　一節切尺八とは

一節切尺八は、鎌倉後期から江戸中期に盛んに吹かれた縦笛である。素材は真竹で、前面に四つ、背面に一つの指孔があり、その真下に一つの節を有する。現存する一節切から一休禅師を始めとする多くの僧侶や、足利義政、徳川家康などの武将が吹いていたことが分かった。残っている一節切の数は定かではないが、200本以上の笛の存在を確認し、他の情報から数百本はあるのではないか、という研究者もいる。ちなみに上の写真で筆者が吹いているのが一節切で、原是斎（1580-1669）作の“頻伽”と銘入りのものである。

②　17世紀に吹かれた手とはやり唄

現在筆者が翻刻している『宗左流』の写本は、唐草模様入りの淡朽葉色の表紙で縦26.5糎，横19.5糎。遊子は、後1丁から成る墨付25丁の譜書である。東京芸術大学の図書館のみが所蔵しており、奏法、音楽理論、曲の謂（いわ）れが詳しく表示され、江戸期の一節切の音楽をさぐるのには貴重な資料である。しかし、書いた年代、人物の名もないため、何時・誰が成立させたものか定かではない。

一節切は古い時代から雅楽の形式に沿って、春は双調管（最低音G）、夏は黄鐘管（A）、土用は一越管（D）、秋は平調管（E）、冬は盤渉管（B）の音高の笛を用いて、季節によって使い分けていた。ちなみに『宗左流』の譜書は、双調14、黄鐘26、一越20、平調16、盤渉24、計100の手（曲）からなっている。

音高は、下から順にフ･ホ･ウ･エ･ヤ･リ･ヒ・上で表記されており、黄鐘管ではA･B･D･E･G･A･B･D（洋楽表記）の音に相当する。どの譜書にも音高の表記はされているが音長が示されていない。また、ブレスの箇所も、指示されている譜書とないものがある。従って、音の長さ、フレーズが明解ではない。当時にあっては、師匠からの口伝が稽古の基本であったため、楽譜は忘備的な存在でしかなかったことによるものであろうか。今後の研究に委ねられる部分であろう。

また、特に17世紀中頃から、一節切は当時のはやり唄（流行歌）を吹くといった大衆芸能と結びついて栄えた。桜の下で酒を酌み交わしながら吹いたり、三味線と一緒に盆踊りの伴奏楽器として使われたり、庶民の生活を潤す楽器として愛好されるようになった。これに対して、元来の一節切奏者は、その流行を快く受け止めなかった。しかしこの現象は、一節切愛好者の数と層を広げ、その流行に一層の拍車を掛けた。この流行は、虚無僧尺八が台頭する18世紀頃から翳りの道を辿り、19世紀中頃には遂に衰退してしまった。

③　今後の研究

今後、次のような内容で研究を深めてゆきたい。1）17世紀の手の奏法と音楽理論の理解、2）呂と律旋法、陽と陰音階への理解、3）他の譜書との内容の比較・検討、4）雅楽との関連、5）16･17世紀にかけての一節切に関する歌からその変遷を探る。

21世紀初頭には一節切研究者、相良保之氏らよるCDもリリースされ、この笛の愛好者の輪が全国的に広がっている。筆者もこの轍と共に歩みたいと考えている。

Profile

国際人間学研究科　国際関係学専攻　D1

野　中　亜　紀（NONAKA Aki）

1988年生まれ。岐阜県岐阜市出身。岐阜北高等学校卒業。愛知県立芸術大学音楽学部作曲科専攻音楽学コース卒業、京都市立芸術大学音楽研究科音楽学専攻修了。3歳よりピアノを始め、日本ピアノ教育連盟主催ピアノオーディション最優秀賞受賞。古代エジプト研究会等で古代エジプト音楽について発表。レクチャーコンサート等でレクチャー及び曲目解説多数。現在、中部大学特別奨学生として博士後期課程に在学中。

Note

古代エジプトにおける音楽

カイロノミー（指揮法）を中心に

はじめに

約4000年にわたる古代エジプトの歴史は、大きく３つの時代に分類される。農耕が始まり2つに分かれていた国土が統一され王朝がはじまるまでの先王朝時代、国土統一からアレクサンドロス大王がエジプトを支配するまでの王朝時代、そしてギリシャ系の王朝プトレマイオス朝の古代エジプト最後の女王クレオパトラがローマに敗れ属国となるまでのグレコ・ローマ時代である。王朝時代だけでも、３つの中間期をはさみ古王国時代（前2686－前2181年）・中王国時代（前2040－前1663年）・新王国時代（前1570－前1070年）がある。古王国時代は王がピラミッドを築き、中王国時代は多くの文学作品が生まれその後の中間期には異民族ヒクソスの侵入があった。新王国時代は神殿建造物が造られ、ツタンカーメン王やラムセス２世など後世に知られる王が登場しアマルナ革命の宗教革命がおこった。そしてその王朝時代には様々な音楽文化が花開いていた。私は修士論文において、外部からの影響を受けず、古代エジプト本来の音楽文化であると考えられた古王国時代の音楽文化がどのようなものであったかを音楽図像を収集、分析し研究を行ってきた。

古王国時代の音楽

古王国時代には、主に貴族の墓であるマスタバ（アラビア語でベンチの意味）内の壁画に音楽の演奏シーンが描かれた。そこには、大きな共鳴胴が特徴でその形状からシャベル型ハープと呼ばれるハープ、現在のアラビア音楽で使用される楽器ナーイと酷似しているフルート、二つの管からなる双管クラリネットが見られる。そして楽器奏者の前には、耳に手をあてた状態で描かれる歌手、そしてカイロノミストが描かれているのがこの時代の音楽図像の大きな特徴である。

カイロノミーとは

カイロノミー(cheironomy)とは、ギリシャ語「chier」＝手に由来する言葉で、ハンドサインによる指示のことである。カイロノミストは演奏者に旋律曲線や装飾法を空中での手ぶりによって指示する人物のことを指し、今日のエジプトでもコプト教徒の合唱長はカイロノミーを使用している。その手の動きは古代エジプトの壁画に描かれたものと酷似しており、現在までカイロノミーは途絶えることなく、生き残っていると考えられる。古代エジプトのカイロノミーは、２つの手のサインとひじの傾き方、腕の高さで音もしくは音高、拍をあらわすと考えられ、壁画で音楽を表現する際に耳で聞くことのできない音を目に見える形で伝えようとする存在であると考えられるのである。また古代エジプトのカイロノミストは僅かな例外を除いて古王国時代の壁画にのみに描かれるのは大きな特徴である。

おわりに

ネウマ譜とは、ネウマと呼ばれる記号を用いた記譜法のことである。西洋音楽史では、５線譜、近代記譜法の原点と言われる。私は、カイロノミストのしぐさと初期のネウマ譜は、確かに何らかの関連があると思われ、カイロノミーはネウマ譜の原点であり古代エジプトではじめて音楽は視覚的に表現され残存することになったと考えている。記譜法のほか、発掘された楽器の中にも現在の楽器の原型であると思われるものが多く存在する。しかし現在の西洋音楽史において、古代エジプト音楽はその歴史の長さにもかかわらず、ほとんど取り扱われることの存在であった。そこでカイロノミーの起源を解き明かすことで、西洋音楽における記譜法の起源に迫ることが可能であると私は考える。また、古代エジプトの墓や神殿に描かれた音楽の場面を集成した研究はなく、今後研究対象の時代を広げエジプト音楽と西洋音楽との関係についても言及していきたいと考えている。

ネカウホルの墓のレリーフ　第5王朝
（メトロポリタン博物館所蔵　08.201.2a-g）

News & Record

2014年度 修士論文の提出と審査結果

2014年度 国際人間学研究科博士前期課程において、下記の13名から修士論文が提出された。2015年2月10日に修士論文報告会が開催され、その後、審査委員会による厳正な審査が行われた結果、提出論文はすべて合格水準に到達していると認定された。

国際関係学専攻

泉　裕介
岐阜県各務原市川島の川まつり
―地域に根付く祭りの変遷とそれに関わる人々の意識―

サハ　タクリ　スニル
A Study on Activation of Handicraft Industries of Nepal

ショウ　ショウ
中国民営企業の国際化
―事例研究を踏まえた競争力向上の課題―

チャン　マイ　トゥイ
日越国際結婚
―在日ベトナム人妻の意識及び生活状況―

パンティ　スシル
The Social Status and Situation of Women in Nepal Patriarchal Practices in Ethnic and Cultural Diversity

言語文化専攻

中垣　徳子
ハ行動詞「―ハフ」と「―ナフ」の語構成

ハルメシ　リマ
アラビア語イスラム圏向け日本アニメのローカリゼーションとその背景的要因

山田　泉
『仮面の告白』論
―「逡巡」する「私」―

心理学専攻

小川　杏子
他者の行動に対する推測バイアスの生起要因の検討

古田　国大
環境に対する認知の違いが姿勢制御に与える影響

歴史学・地理学専攻

伊藤　優
札幌市における小地域を単位とした二酸化炭素排出量の試算と低炭素化のポテンシャル評価

佐野　浩彬
浜松市沿岸部における津波避難施設の圏域分析
―避難に影響する環境条件に注目して―

林　泰正
大正昭和期における都市間地域の市街地化過程
―岐阜駅周辺を事例に―

2015年(9月修了)修士論文の提出と審査結果

2015年 国際人間学研究科博士前期課程において、下記の2名から修士論文が提出された。2015年6月24日に修士論文報告会が開催され、その後、審査委員会による厳正な審査が行われた結果、提出論文はいずれも合格水準に到達していると認定された。

国際関係学専攻

チン　ムテン
中国市場における日系企業の販売戦略
―中国の経済構造の変化と外資政策の転換を踏まえて―

歴史学・地理学専攻

吉原ゆう子
「メイド・イン・オキュパイド・ジャパン」の史的考察
―名古屋陶業界を中心として―

2014年度 国際人間学研究科博士前期課程学位授与式を開催

2014年度 国際人間学研究科博士前期課程学位授与式が2015年3月22日に行われ、13名の修了生が晴れて修士の学位を取得した。

2015年(9月修了) 国際人間学研究科博士前期課程学位授与式を開催

2015年（9月修了）国際人間学研究科博士前期課程学位授与式が2015年9月30日に行われ，2名の修了生が晴れて修士の学位を取得した。

国際人間学研究科教員による研究報告会を開催

国際人間学研究科の国際関係論専攻で中国経済論を研究されている舛山誠一教授と、同じく歴史学・地理学専攻で近代フランスの女性史研究をされている見崎恵子教授による研究報告会が2015年7月22日に開催された。研究科所属の教員、院生をはじめ多数の参加があり、活発な議論が行われた。報告会終了後は、会場を移して懇親会が開催され、さらに議論が続けられた。

中部大学国際人間学研究科主催

第3回　教員研究会

2015年7月22日（水）
研究科委員会終了後（17時30分～）

25号館　2階　人文学部会議室

舛山 誠一教授
国際人間学研究科 国際関係学専攻
「中小企業のアジアビジネスにおける成功要因の研究」

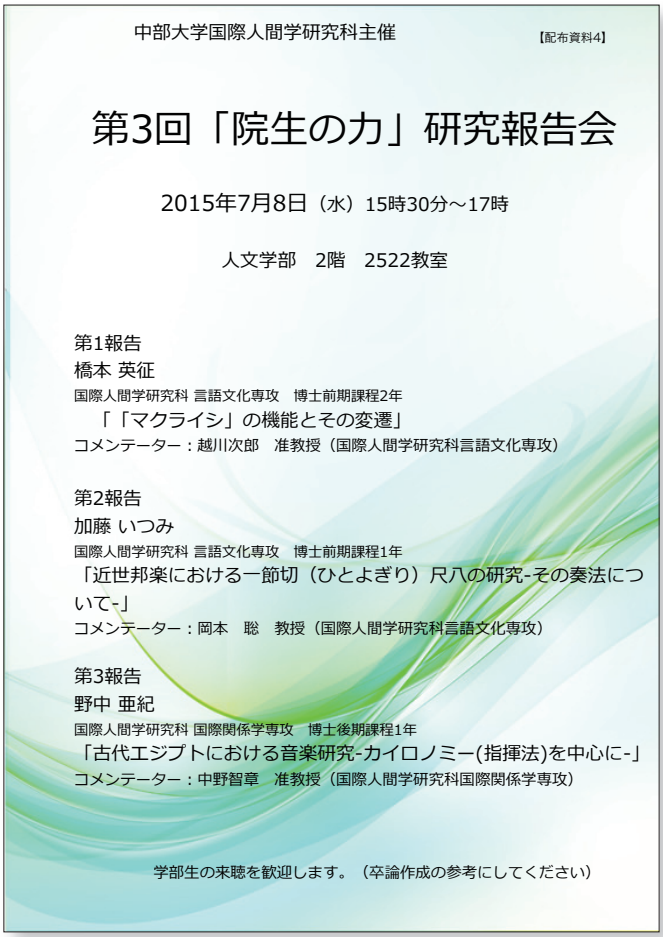
見崎 恵子教授
国際人間学研究科 歴史学・地理学専攻
「20世紀初頭フランスにおけるフェミニストの課題」

院生・学生の来聴を歓迎します。

（終了後，交流会を開催します。お気軽にご参加下さい。）

院生による研究報告会「院生の力」を開催

院生による研究報告会を2015年7月8日に開催した。修士論文の作成とは別に、院生が日頃、どのようなテーマに関心を持ち、どのような研究に取り組んでいるかを多くの方に知ってもらうのが主な目的である。当日は、国際関係学部、人文学部の学生の参加もあり、指導教員によるコメントを含め、様々な意見が飛び交った。



中部大学国際人間学研究科主催　【配布資料4】

第3回「院生の力」研究報告会

2015年7月8日（水）15時30分～17時

人文学部　2階　2522教室

第1報告
橋本 英征
国際人間学研究科 言語文化専攻　博士前期課程2年
「「マクライシ」の機能とその変遷」
コメンテーター：越川次郎　准教授（国際人間学研究科言語文化専攻）

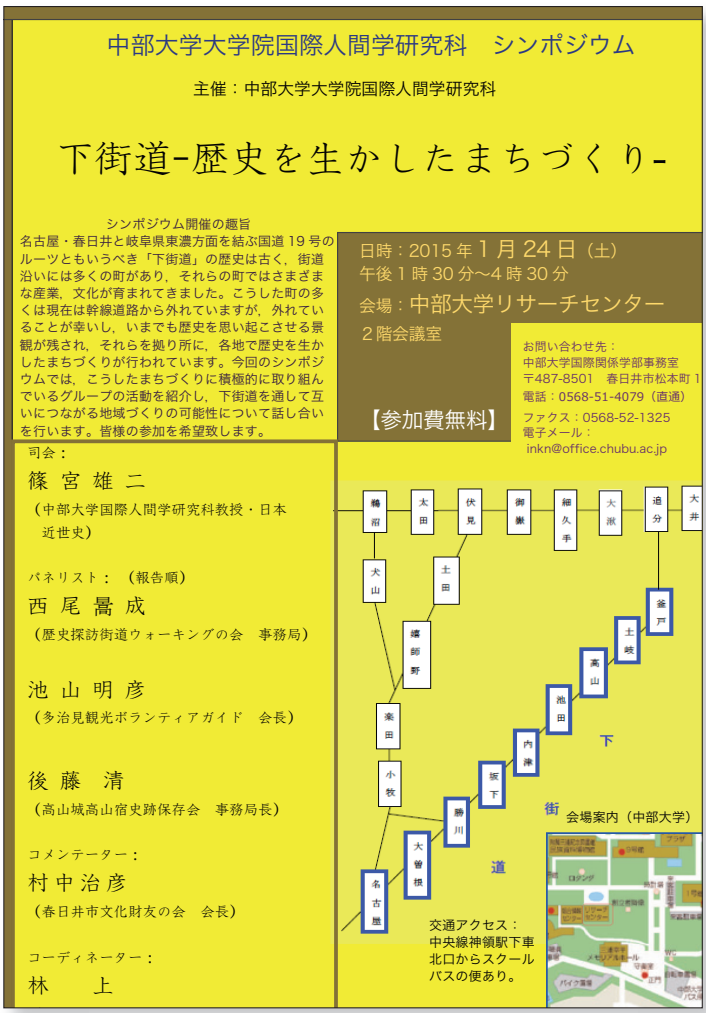
第2報告
加藤 いつみ
国際人間学研究科 言語文化専攻　博士前期課程1年
「近世邦楽における一節切（ひとよぎり）尺八の研究-その奏法について-」
コメンテーター：岡本　聡　教授（国際人間学研究科言語文化専攻）

第3報告
野中 亜紀
国際人間学研究科 国際関係学専攻　博士後期課程1年
「古代エジプトにおける音楽研究-カイロノミー(指揮法)を中心に-」
コメンテーター：中野智章　准教授（国際人間学研究科国際関係学専攻）

学部生の来聴を歓迎します。（卒論作成の参考にしてください）

「下街道ー歴史を生かしたまちづくりー」のシンポジウムを開催

国際人間学研究科主催によるシンポジウム「下街道－歴史を生かしたまちづくり－」が、2015年1月24日に、中部大学リサーチセンターで開催された。下街道は尾張・名古屋と美濃東部・信州を結ぶ街道として歴史的に重要な役割を果たしてきた。国道19号の前身ともいえる道であり、中部大学キャンパスのすぐ北側を通っている。シンポジウムでは下街道沿いに残されている宿場、集落、寺社、城跡など歴史的遺産を生かしてまちづくりを進めている事例が報告された。



中部大学国際人間学研究科

国際関係学、言語文化、心理学、歴史学・地理学の各専攻は、文化的、歴史的基盤にたちながら、国際社会でコミュニケーション能力や関係構築能力が十分発揮できる人材、あるいは人間、社会、地域の本質を把握し、柔軟に行動できる人材を総力を挙げて育成します。

国際関係学
言語文化
心　理　学
歴史学・地理学

国際関係学専攻

科目【博士前期課程】

国際政治経済研究コース

政治経済研究特論/国際法特論/国際政治学特論/国際経済学特論/国際機構論/応用計量経済学/国際金融論/国際協力論/開発経済学特論/開発ガバナンス論/発展途上国論/国際社会開発論

国際社会文化研究コース

社会文化研究特論/文化人類学特論/国際社会学特論/観光人類学特論/国際ジェンダー論/比較文明論/比較環境論/比較社会史論/比較宗教論/ヨーロッパ社会文化研究特論/アメリカ社会文化研究特論/中東・アフリカ社会文化研究特論/中国・アジア社会文化研究特論/国際比較文明特論/地域言語特殊研究

共通科目

研究方法論/臨地研究論/近代世界表象体系

特別研究

研究指導/課題指導

研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

国際政治経済学専門研究演習
国際社会文化論専門研究演習
国際比較文明論専門研究演習

言語文化専攻

科目【博士前期課程】

ジャーナリズムコース

研究基礎（情報収集、メディア・クリティシズム）/現代国家・制度特論/現代史特論/情報産業・流通特論/現代社会特論/社会心理学特論/情報技術とメディア特論/ジャーナリズムと倫理特論/現代の広報特論/報道記事作成技法/ドキュメンタリー作成技法/プロジェクト/研究指導

英語圏言語文化コース

応用言語学特論/英語教育法特論/英語学特論/英米文学特論/英語圏言語文化総論/研究指導

日本語日本文化コース

日本語学特論/日本語教育学特論/古典文学特論/近代文学特論/日本文化特論/伝承文芸特論/日本芸能特論/国語教育特論/研究指導

共通

近代世界表象体系

研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

メディア・コミュニケーション専門研究
英語圏言語文化専門研究
日本言語文化専門研究

心理学専攻

科目【博士前期課程】

心理学科目群

心理学研究法特論/知覚心理学特論/健康心理学特論

学校心理学科目群

認知心理学特論/社会心理学特論/発達心理学特論/臨床心理学特論/教育心理学特論/学習指導法特論/学校教育特論/障害児心理学特論/生徒指導特論/心理検査法特論/学校カウンセリング特論/教育統計学特論

特別研究

研究指導/課題指導

研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

学習心理学専門研究/教育心理学専門研究/認知心理学専門研究/臨床心理学専門研究

歴史学・地理学専攻

科目【博士前期課程】

歴史学コース

日本古代史特論/日本中世史特論/日本近世史特論/日本近代史特論/日本現代史特論/アジア史特論/中国史特論/ヨーロッパ史特論/アメリカ史特論/社会経済史特論/思想史特論/文化史特論/技術史特論/美術史特論/歴史学研究

地理学コース

経済地理学特論/産業地理学特論/歴史地理学特論/文化地理学特論/都市地理学特論/地理情報学特論/都市政策学特論/自然地理学特論/地誌学特論/地理学研究

共通科目

近代世界表象体系

特別研究

研究指導

研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

歴史学専門研究演習
地理学専門研究演習

Chubu University Graduate School of Global Humanics

●発行：中部大学大学院国際人間学研究科
●編集者：林　　上
●発行日：2015 年 10 月 15 日
●〒487−8501　愛知県春日井市松本町 1200
●中部大学国際人間学研究科（国際関係学部事務室）
●電話：0568-51-4079（直通）　●ファクス：0568-52-1325
●電子メール：inkn@office.chubu.ac.jp
●国際人間学研究科ホームアドレス：
http://www3.chubu.ac.jp/graduate/global_humanics/